

旧淀川右岸地域の都市変遷

西本 貴洋¹・吉川 眞²・田中 一成³

¹学生会員 大阪工業大学大学院工学研究科都市デザイン工学専攻博士前期課程
(〒535-8585 大阪府大阪市旭区大宮5-16-1, E-mail:nishimoto@civil.oit.ac.jp)

²正会員 工学博士 大阪工業大学工学部都市デザイン工学科
(〒535-8585 大阪市旭区大宮5-16-1, E-mail:yoshikawa@civil.oit.ac.jp)

³正会員 博士(デザイン学) 大阪工業大学工学部都市デザイン工学科
(〒535-8585 大阪市旭区大宮5-16-1, E-mail:issey@civil.oit.ac.jp)

大阪市内を貫流する旧淀川水系の歴史は古く、大阪繁栄の礎となっている。しかしながら、高度経済成長期において数多くの堀川を消失した結果、現代大阪には水都のイメージを感じられる場所は旧淀川の近辺を除き、多くは残されていない。そこで、本研究では空間情報技術を活用することで、現存する旧淀川の右岸地域を中心に都市化・市街化の変遷を辿り、市街地の変化と堀川の変化の両面から歴史の変遷の把握を目的としている。具体的には、GISを活用することで市街化の達成状況を把握するためのデータベースを構築している。また、地形図から地理情報として判読できる建造物に着目し、市街地の内部における変遷の把握を試みている。

キーワード: 都市変遷, 堀川, 市街化

1. はじめに

大阪市内を貫流する旧淀川の歴史は古く、大阪繁栄の礎となっている。その証拠に江戸期から昭和期にかけて旧淀川の周辺では多数の堀川が開削されていた。そのため、商工目的の利水や娯楽といった多様な水辺の利用により、各河川・堀川に面した地域一帯では特有の文化や景観が形成されるようになった。

ところが、戦後から高度経済成長期にかけて、生産性を優先した都市基盤の整備が日本の各都市で求められ、大阪でも市内を流れる堀川の埋め立てや既成市街地周縁の急速な都市化などが次々に達成される。都市として急速に成長したものの、その反面、河川・堀川の活用で育まれた水都大阪の歴史的な文化や風景の多くを失う結果も招いてしまった。

一方で、高度経済成長期における都市域の拡大も沈静化し、安定期へと突入した現代の大阪では過去の都市形成過程上の経験から、現存する河川・堀川の維持管理や「水都」にまつわる歴史を活かした地域プロジェクトなど河川・堀川を都市の資産として継承・活用する取り組みが行われている。また、地域の発展に関連した歴史的建造物の保護・保全への関心は行政に限らず市民の間でも浸透しており、歴史性の有無は市民が持っている都市への関心を左右する重要な要素であると言え換えられる。

しかしながら、水都のイメージを感じられる場所の多くが残されていないのが現代大阪の状況である。このような背景を踏まえると、河川・堀川の活用で築かれてきた水都がいかんにして現在の姿に変わってきたのか、その歴史の変遷について理解を深めることが大阪の魅力となる歴史的価値の創出につながり、将来の都市像をイメージする重要な手掛かりとなる。

2. 研究の目的と方法

江戸期より水辺の活用で栄えた大阪が明治以降、都市化・市街化の積み重ねによって現在の姿に変化してきた都市形成過程を考慮し、本研究ではGISを用いて、市街地の変化と堀川の開削・消失の両面から、都市の変遷を明らかにすることを目的としている。これにより、変遷のなかで消失した旧淀川周辺の特徴的な都市空間の存在を再認識し、その分析結果をもとに大阪における都市変遷を視覚的に表現することを目指している。そこで、今回は旧淀川を中心とした市街化を把握する第一段階として旧淀川と呼ばれる大川から安治川にかけての一部地域を選定し、変遷の把握を試みている。

具体的な研究方法として、本研究室で歴史環境GISの構築をめざした研究により確立された手法を活用し、研

究を行う。まず、収集した古地図や旧版地形図をGIS上の現代空間に定位する¹⁾。次に、この地形図データベースから各時代で市街化の達成状況をトレースし、市街地データベースの構築を図る。くわえて、市街化が達成された都市域において主要な建造物の抽出を試み、本研究室で構築された堀川の変遷図²⁾を参考に抽出した建造物の変遷図を作成し、比較することで分析・把握を行う。

3. 研究の対象地域

研究の対象とする大阪は江戸末期、明治政府の誕生による江戸幕府の崩壊、それともなう蔵屋敷の廃止から経済的な打撃を受けていた。しかし、明治4年の造幣局の開業が先駆けとなり旧淀川の右岸では大規模工場が増加、商業に変わる近代工業の発展で大阪は経済的衰退の危機を免れた。さらに戦時下の好景気が後押しとなり建造物の建設が急速化し、市街化が広まったことで現在の大阪の形成に至った。

このような背景から大阪における都市変遷を把握する際、まず、都市形成過程の初期変化がみられた地域において市街化と堀川の変化を捉えることが必要になる。そのため、本研究の対象地には旧淀川右岸の地域を選定している(図-1)。



図-1 対象地

4. データベースの構築

(1) 地形図データベース

明治期から現代にいたるまでの大阪の都市形成過程に

関する研究を行うにあたり、まず、収集した古地図や旧版地図をGISを用いて、幾何補正することで現代空間に定位した。データベースとして構築した時期は以下の6期である(表-1)。

表-1 古地図・旧版地図一覧

名称	年代	縮尺
仮製地形図	明治22年(1889)	1/20000
正式図(1/20000地形図)	明治43年(1910)	1/20000
正式図(1/10000地形図)	大正10年(1921)	1/10000
正式図(1/25000地形図)	昭和5年(1930)	1/25000
正式図(1/25000地形図)	昭和25年(1950)	1/25000
正式図(1/25000地形図)	昭和45年(1970)	1/25000

(2) 市街地データベース

市街地のデータベースは地形図データベースのトレースにより作成している。また、本研究室で構築された大阪市における堀川のデータベース³⁾を活用し、市街化と堀川の変化を読み取ることで分析・把握を試みている(図-2; 図-3; 図-4; 図-5)。

江戸期まで旧淀川の右岸地域には、大坂三郷である天満組があり、その北側にはまだ田園風景が広がっていた。しかし、明治7年に三郷北端の位置で大阪駅が開設されると、堂島-大阪駅間の地域から急速に市街化が進む。明治11年には堂島掘割、梅田入掘の開削によって水運と鉄道の連携が図られるなど旧淀川右岸の梅田付近では市街化が進行すると同時に、大阪駅がこの地域における拠点となりつつあった。また、明治22年は大阪市制の成立年であり、当時の規模は前身の大坂三郷と比較しても差はなかったとされている。

以上の史実を前提として構築した市街地データベースから分析すると、昭和22年の天満の北側には小規模な建造物が存在していることから、市街化が始まりつつあったことが確認できる(図-2)。

また、明治18年には数日にわたる暴風雨により淀川本支流のほとんどが決壊した。この時発生した洪水が都市部を襲った影響を受けて、治水を目的とした中津川の改修工事が明治20年代からはじまった。明治43年には中津川の改修工事が完了し、新淀川が誕生している。くわえて、前年の天満焼けによる曾根崎川(蜷川)の上流部埋め立て、JR線より南側の密集市街地の形成、さらに北側の広い範囲でも市街化がほぼ達成されていることが確認できる(図-3)。昭和5年に至ると大阪駅周辺にJR線・阪急線・阪神線といった鉄道路線の集積が確認でき、大阪駅の南に形成されていた堀が大阪駅の北側まで延長されている(図-4)。

昭和20年には第二次世界大戦による大阪空襲のため、大阪市内は壊滅的な被害を負ったものの、昭和45年には

戦後復興開発により市街地の再建が達成されている。その一方で、JR線が大阪湾まで路線を延長したことや港湾設備が湾岸部に造成された影響を受けて、梅田に形成された堀の需要は減った。そのため、昭和43年において天満堀川や梅田入堀などの堀川が消失していることが昭和45年の地形図から確認できる（図-5）。

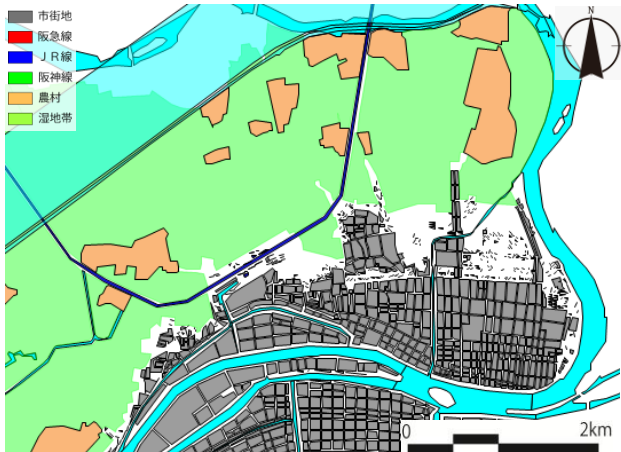


図-2 明治22年の市街地



図-3 明治43年の市街地



図-4 昭和5年の市街地

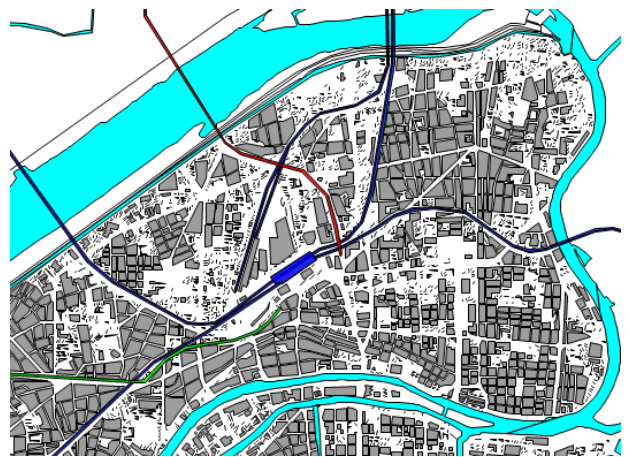


図-5 昭和45年の市街地

また、梅田周辺が大阪駅の開設を機に急速に市街化するとともに、旧淀川である安治川の右岸地域にも市街化が進行している（図-6;図-7）。

この地域は明治20年頃まで新田として利用されていた。そのため、水田や沼地が広がっていたが明治40年代から埋め立てによる土地開発が行われる。それまで、その地域一帯は明治31年に大阪駅から旧淀川下流の桜島間で開業した西成鉄道（現・桜島線）が貨物輸送を行うのみで周辺はまだ市街地ではなかったとされている⁴⁾。

明治22年の市街地をみると河川沿いに形成されているが、安治川から離れた地域にはまだ市街化が及んでいないことがわかる（図-6）。

安治川の右岸地域では大正期から土地開発が取り組まれたことで、梅田方面から広がってきた市街地はさらに南方に進んでいった。また、この開発は住友家を中心とした土地会社によって行われていたことが文献調査により判明している。その後、昭和5年にはこの地域でも市街化が達成されていることが構築したデータベースから把握できた（図-7）。くわえて、昭和45年にはこの地域でも多くの堀川が埋め立てられている。

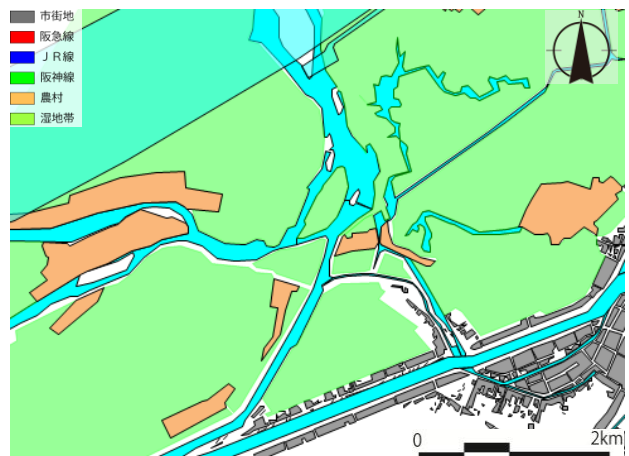


図-6 明治22年の市街地

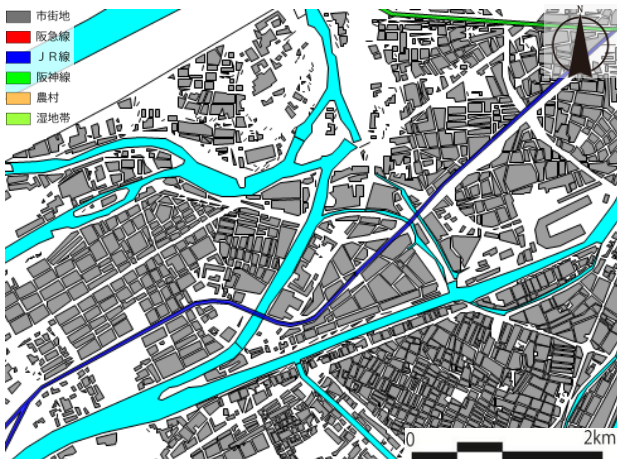


図-7 昭和5年の市街地

5. 市街地と堀川の変遷

次に、都市形成過程における市街地の変化を捉えるため、市街地における建造物リストの構築を試みている。建造物リストは地形図上の比較的判読が容易な建造物に着目して構築する。具体的には地形図データベースを中心に建造物を抽出し、開業年、解体年、跡地利用の状況といった属性を付与することで、建造物リストを作成した(表-2)。これによって、市街地データベースで判読が困難な市街地の内部における変化を捉え、詳細な把握を行う。

表-2 建造物リスト一覧(一部)

No.	建物名	設立年	解体年	跡地利用状況
1	造幣局	1871年	-	-
2	三菱金属大阪精錬所	1891年	1989年	大阪アメニティパーク
3	天満紡績会社	1887年	1900年大阪合同紡績と合併	中西金属工業
4	大阪合同紡績会社	1900年	1931年東洋紡績と合併	住宅
5	東洋製紙会社	1906年	1925年	学校および住宅
6	分銅会社	1893年	1917年古河に吸収	天酒市場
7	大日本紡績会社	1894年	1969年ユニチカへ合併改名	下福島公園
8	大阪紡績会社	1882年	1900年合同紡績へ	不明
9	大阪モスリン紡績	1896年	1927年東京毛織と合併	1941年鐘紡が工場買収
10	住友伸銅所福島工場	1897年	1935年住友金属工業となる	中央卸売市場
11	渋谷紡績会社	1879年	後に堂島紡績	不明

結果より、建造物跡地の利用状況をみると、住宅や公園など土地利用の用途が変化していることがわかる。また、表-2の建造物リストを堀川の変遷図²⁾とともに表示し、比較を行った(表-3)。

表-3 建造物変遷リスト(一部)

河川・源流名	元禄~徳川期		[大正 昭和]		平成 2000
	1900	1980	1980	1980	
淀川					
河内川					
天満川					
淀川					
河内川					
天満川					
企業・会社名	元禄~徳川期		[大正 昭和]		平成 2000
	1900	1980	1980	1980	
三井物産					
三菱金属大阪精錬所					
天満紡績会社					
大阪合同紡績会社					
東洋製紙会社					
分銅会社					
大日本紡績会社					
大阪紡績会社					
大阪モスリン紡績					
住友伸銅所					

その結果、大阪における建造物の増加時期が1900年前後であることを特定した。この結果から、本研究の対象地における市街地の拡大は工業的発展の先駆けになった造幣局を筆頭に水運至便や工業用水の確保を目的とした工場などの建造物が旧淀川沿いに立ち並んだことが要因であると考えられる。また、大阪駅の開設と路線の延長、それともなう鉄道・堀川との連携が交通の便を向上させたことで立地が好条件になった。これによって、旧淀川右岸全域での市街化が急速化したことが考えられる。

以上の分析結果から市街化と堀川の両面より旧淀川右岸の都市変遷を詳細に把握することができた。

6. おわりに

(1) 結果と考察

本研究では旧淀川を中心に変遷の把握を行うためにまず、旧淀川の右岸地域を対象地として都市変遷の主要要素である市街地の変化と大阪の特徴である堀川の変化を把握した。また、市街地の変化を拡大過程と市街地内での変遷といった二つの観点から分析を試みた。とくに、建造物に着目した市街地内での変遷は地図判読と文献を活用し、図式化したことで視覚的かつ詳細に把握することができた。

(2) 今後の展開

今後の課題として、旧淀川の対岸や以前より市街地が形成されていた既成市街地での変遷把握を行う。また、その変遷把握に用いる建造物リストを対象地域の拡大と抽出建造物数の加算によって詳細にする必要がある。さらに、都市変遷の視覚的把握を目指してGISとCAD/CGの統合的活用による都市変遷の3次元化を行う必要がある。

参考文献

- 1) 田ノ畑聡史・吉川眞・山野高志(2004) ; 過去との繋がりを考慮した位置参照点の提案, 地理情報システム学会講演論文集, 13, 447-450.
- 2) 松村隆範・吉川眞・田中一成(2010) ; 水都大阪における歴史環境の分析, 地理情報システム学会講演論文集, 19, 5C-2. pdf (CD-ROM).
- 3) 木村明人・吉川眞(2005) ; 大大阪の形成, 地理情報システム学会研究発表大会講演論文集, 13, 447 - 450.
- 4) 大阪市:大阪築港100年 一海からのまちづくりー 上巻, pp200-205, 大阪市港湾局, 1999.